第4回　役員訪問　聞かせてください

聞き手／ 常任理事　藤 井 美 穂

・生 年 月 日　昭和16年1月15日
・出　生　地　中川郡池田町
・出 身 大 学　北海道大学医学部
　　昭和42年卒 第二外科
・好きな言葉　誠実に一つ一つ

●徹底した現場主義

藤井：加藤先生が斗南病院に着任されて2年半。“奇跡の復活”といわれる病院建て直しを遂げられましたね。

加藤：当時の病院はアメニティも十分でなく、統合論に揺れていたため職員のやる気も欠落していたように感じました。一刻も早く改善しなければと危機感を持ちました。

まず始めたことは、病棟回診です。週4日、総師長と各フロアを回り、患者さんとお話ししました。そうすることで医師をはじめとする職員も患者さんのところへ行く回数が増え、患者さんの満足度も上がったのでしょう、リピーターの増加につながりました。お掃除パトロールの隊長になって、清掃スタッフに直接指導も行いました。

経営面では、赤字を出しても系列病院から補填するやり方では好転しないと考え、本部に掛け合い独立採算の裁量をもらいました。ここ2年間、利益の大半は病院のリニューアルに投資しています。

現場に出て、自分も体を動かして見本を示すことで、職員の意識に変化がみられました。とはいえ、私が院長になって約2年半、まだまだ課題は山積しています。今後も職員と一丸となって、より良い病院を目指して頑張ります。

1995年 新人医局員を迎えて。右から2人目が長男健太郎

●パートナーとして後輩を指導

藤井：私、札医大の神保孝一先生（皮膚科学講座教授）に教えていただいた言葉に大変感銘を受けています。

「医師は卒後10年区切りで4つの役割を持つ。①卒後から研修、②大学の外で学ぶ、③後輩を育てる、④理想の組織を作る」。

自分が今どの位置にいるのかいつも確認しているのですけど、先生はどのようにお考えですか？

加藤：ほぼ同感ですね。僕の場合「後輩を育てる」時期に、手術は自分が執刀するのではなく、ことごとく助手に回りました。僕はあくまでもパートナーです。そうして技術を習得した教え子たちが、各地でリーダーとして地域医療に貢献し、さらに後輩を育ててくれている。そう考えると自分を少しだけ褒めてあげられるかな。理想の組織はまだ作れていません。

●教授職時代の教え子だった長男･次男

藤井：「最近嬉しかったこと」という質問に、長男の結婚・次男に長女誕生とありますが…。

加藤：長男・次男ともに外科医なんですが、僕が大学の教授職だった頃の教え子でね。講義はよくさぼっていましたね（笑い）。

ある時、長男が真面目な顔をして「外科に進みたい」って言うんです。教授は学生たちからの批判の対象ですから驚きました。またある時、外来で長男が「教授どうしましょうか？」って言うもんだから、あの時ばかりは耐え切れず笑ってしまいました（笑）。

長男は消化器がん、次男は肺がんと、いずれもこれからの外科医としてやりがいのある方向へ進みました。がんの治療法を肴に酒を酌み交わすことができるのは幸せですね。これに内科医で血液がんをやっている娘が加わると一段と賑やかになります。

藤井：お孫さんに会うのが楽しみですね。

加藤：1歳だから、少し話すようになりました。家内は眼科医ですが、孫に会う

北海道医師会　副会長　加 藤 紘 之

ために勤務時間を短縮したもんですから、家内にばかりなついちゃって……。

●北海道の地域医療について

藤井：今まで医師はボランティア精神でやってきたところがあると思います。疲弊してしまって、社会が変わらないと医療がパンクする寸前かなと思うのですが。

加藤：医師会が本気で患者さんと地域医療のことを考えるならば、今の活動のままでは決して良くならないでしょう。北海道には約12,200人の医師がいますが、およそ半分が札幌圏に集中している。この地域格差に目をそむけてはいけないと思います。医師会の政策を通じて地域の医師や女医さんが働きやすい環境を作るなど、早急な是正が必要でしょう。

藤井：脳外科、小児科、外科、産婦人科などの志望者が減り、顕著な医師の偏在が生じつつあることについてはどのようにお考えですか？

加藤：診療に伴うリスクを嫌い、そのような科に若い人たちが集まりづらくなっているのは問題ですね。本来助かるべき救急患者やある疾患を持つ患者さんが助からなくなってしまう。能力を持った医師が機能できる環境を整備することが急務です。

藤井　北海道の地域医療の再建が望まれますね。

加藤：医師会の役員になったことで道の委員になり、各地の現地調査で地域の実情、苦しみが見えてきました。しかし現状を打開するには、自治体病院の連携など首長の意識改革も重要であると感じました。道には議論だけでなく、研修医を医療過疎地域に派遣するなど地方への援助、指導を実践してもらいたいですね。僕を知事にしてみない？（笑い）　これは冗談ですが、今の北海道には上層部に、医療を理解して強力なリーダーシップを発揮してくれる人がいて欲しいですね。

2001年 医局対抗野球。11年間で10回優勝した。前列右から2人目が次男達哉、左端は後任の近藤　哲教授

インタビューを終えて

外科医の切り口は鋭い

常任理事　藤 井 美 穂

渓流釣り、テニス（眼科医の奥様と「愛のラリー」をされているそう）といったご趣味のほか、最近はガラス細工の趣味もたしなまれる。思い描くデザインをナイフで形にしていくことが楽しいとのこと。外科医としてメスを扱う手さばきと同様、その語り口は温和だが、本道の地域医療に対して「鋭く深いメス」のような発言が印象的。